扶桑皇統記圖會

前編 二

亜13
2472
2

国立国会図書館
2472
2

扶桑皇統記圖會前編巻之二目録

仲麿妻貞死條

養老滝涌出

孝子養老の滝と汲の圖

仲麿留学于唐上

於高樓餓死詠歌支

安禄山等ヵ欺うとそ仲麿樓上ヵ餓死とる圖

聖武天皇御受禪

満月九主從討好根條

満月九毋の仇安倍好根を討圖

満月丸呈吉備公血書　江南子母銭の事
吉備大臣入唐　仲麿霊鬼と吉備公語旧怨條
吉備大臣鴻臚館にて仲麿ケ昊かめん圖
唐帝与群臣評議　玄東妻諫良人條
吉備大臣与二玄東圍碁　隆昌女隠黒石吉備公仁恕事
吉備公与二玄東一棋を圍こめん圖

目録終

扶桑皇統記圖會前編巻之二

浪華　好華堂野亭参考

養老瀧湧出　仲麻呂妻貞女條

霊亀三年丁巳の九月、美濃國の守護人より朝廷へ奏聞して曰、當國多度山と申深山より醴泉湧出い其縁故を聞ふ。當國愛発郡多度山の麓に住る小佐次と申樵夫のひと、生質親に事て甚だ孝心深く、貧れる身ゆえ孝養を尽くし、更に子路曾参も劣だ。其父年七十余才に及び、常に酒を好んで飯を食せず。只朝夕酒を糟にて齢を保ち、酒あれば時、餓苦いも小佐次僅に撰夫と産業といへ家極く貧とも身力を尽くして拵だ。其身ハ蔬食をくらい得る所の銭を尽く酒に易て又妻を娶ひいまだ一向孝養小丹誠を凝して倦ことなく飲しむる酒少れを平日に愁ひい

とろ。或時山深く入て木を伐まうに疲をいたく岩頭に伏て睡眠のい〻頃に
酒の香鼻を穿ちく。眼を覚して其辺を見いに。先刻までは有ッ一流の滝流れ
落。其滝壺の水酒の香ありと不審おもひ試に手に掬で飲いに。水の味ひ甘美りて
殆も醇酒のごとくいたく飲て大に酔ひよりて
に又大いに悦び是ハ是ぞの酒ぞと遂に勝一醇酒と飽まで飲て大に酔ひよりて
小佐次深く悦び是天道与の所ぞんで夫より毎日彼滝の水を汲取ッて又
残餘ひいたく自然と負を忘れ遂に銭をいて衣服食に買求めて又身を温ひ
倍孝心を尽ひ一村の者是を傳ひ我もと彼滝の水を汲取て飲いに常の水ハりく
ぞ。小佐次が汲取ゆく八美酒の味ひハい是全く彼が孝心を感じのひ神仏の与への
所ぁ〻と衆人ハ誠ハ不思議の醴泉ぉいたく奏聞仕りいとなり。天皇叡聞まり
すて御感不浅誠ハ孝心の徳ハ地下ハ金の釜を得氷上ハ雙の鯉を得る例
もあり。其孝子の徳ハ肉くさる醴泉の湧出ハ國の祥瑞なりと勅紹ありひ美濃の
守護人ハ賞を賜ハり群臣を従へて濃州養老山へ御幸ありひ件の滝を叡
覧まりく。樵夫小佐次を召出させるひ滝の水を汲せて召上りくハ実も甘美ハて
常の水と異なりまたく感斜おもひ。供奉の百官ハも飲めるハ皆舌をまき感
じ面部手脚を洗ハ者ハ皮膚おのづから成疾ある者ハ疾痊癒ある者ハ痛を忘れ
病ある者病をおこす痕治りて天皇是ハの奇特と聞食弥感じ思召ハ佐次が老
残給りし其孝徳を表しのひ遂ハ宝輦を環されて都へ還御なりひて后年
号を養老元年と改えりまふ。ハ百行の本ハて。彼姜詩が泉と得孟宗
が筍と得ハも天其至孝を感じて子ある所ぁり。小佐次が醴泉を得ハも同ハ終
ハて名万代の亀鑑ハ残せり。人の子たる者ハ必ず孝行をなすべんき事なりとハ是

八芽出度くあり。然ル又良なく。安部仲丸が妻若狭ガ身の上なり。懐妊満月丸已ニ三才ホなりぬれども。夫仲丸が消息絶ておろそかなれば。昼夜待ち暮れて袖ニ涙乾く間もなく。彼悉達太子の后妃耶輸陀羅女ガ太子出宮の後三年ホドして。羅睺羅尊者と生宮中ニまぎれ籠り昼夜太子の帰リを待ち給ひし紅涙ホ鉄を穿ツのたぐひ今の若狭ガ身の上ホぞ思ひ合されける。うき憂身の上ホ又一層の愁を重ねる其上奈何とせん。安部好根ハ仲丸ガ人唐せしと聞ホ留守の邸舎へ帰り虚誕の幻を巧ミて若狭江寄ホ入り満ち始の程ハ偽て篤実の体ホもてなせども年月乃ち立ホ従ひ漸くホ不頼の本性を露ハし垂て心ゆけば若狭を己ガ側室ホせんと妻ホ謀てさまざまの端ホおこし。或ハ色目ホまぜ想を通ぜんとせらるゝ。貞操正シき草狭何ぞ不義の為ホ身を汚さんや。都て好根ガ面をうる妻を厭い吾丙舎ホ引籠ぐちホて。弥夫の帰朝を待心切なり。好根ハ若狭ガ意ホ従ハざる故ニて。倍濫念熾ホなり今

ホ禁じ一夕大ホ酒を過し十分の酔ホ乗じ若狭ガ丙舎へ踏込対面して曰ク日頃我兼て親くなさ〻ハ唐帝ホ仕官して食禄を受妻を娶リ永く彼土ホ留まらん体なりと唐土ニ筑紫へまかり者より兎ニ角ニ角ニ言ひ越し無ガ我弟帰朝せる夫有ぬるゆゑ汝ハ帰らぬ夫と待ち徒ホ盛の花とうつろハさんより我ホ従ひて妻となれハ我子となし緒養と教成長の後ハ安部の家名を相続させむぞと口ニ出る仮ホ偽言と言ふべきニもあらざれバ若狭ハ言の答もおさ〳〵なくうつむき居たるを好根猶も百般ホ約を尽し強て従ハせんとせしも若狭ハ尚も答とおもず満月丸と掻抱て座を起んとするホぞ好根勃然と怒を並発して紬を払ひ座辺へ曳居眼を睜て曰ク是ハ情の強き女ぞ汝ガ耳聾たるも非ずば先刻より我言ヲ一ト言を発ぬ事ハあらじ。抑此家ハ我俗むる所ぞ。又舩宇弟の愛ホ溺れ

節の科を名ゐて我を追出す。仲丸が家を閉せず。吏無慈悲無道の斗らひあれども我孝道と重んじて父を恨ず身退くのみ。仲丸入唐の折柄我が留守中の後見と附託せし兄弟の義と思ひて。仕官の俸禄を捨ての家へ立帰りて。今日まで後安く暮させり。然るに仲丸唐帝の臣下となり帰朝せざれば。我此家を相続せん人ハ理の當然ぞ。誰う是を難ずる者あらんや。你も満月丸と便なく思ひ。我心ま従ひて衾衣と倶ず。満月丸が身の安穏と量ること母の慈悲ともいふべし。然ず帰らぬ夫が操を立て我家を背ハ貞節が似て貞節あるぞ。我此家を相続して你母子を追出さゝ。満月丸ハ又の家名を嗣吏能ハず。是你仲丸へ對して不貞あるぞ。身の操ハ破るとも。夫の宿が家督を嗣ことを。真の貞操といふ。猶此理と弁ず我が従ハざるぞ。古より縁ありて如く。我人が難面ずれば入又我が難面あり。你母子と追出す迚もなく満月丸と目前刺殺。你ハ土室が囚置て生ず殺ず。多くの苦患を与ふべし

如何やくと迫て言攻ども。若州が泣沈て声をぶるゝ。好根奈が憤り斯程が利害と統ども猶従ず。其義ぶ先覚て刺殺れんと。若州が抱ける満月丸が襟掻抓んで引出さんと。さるほどに若州残れ急が其手を遁り留先暫ーもさせも左程ま〻が數ゐ年妻と思ひ給ふぞ御心が従ひ侍べし。先刻より左右の答てなく進せざるハ御身の縦ふ空言ぞ残り疑ひ侍べし。弥御幻偽言あらぬ今宵深更人定りて妾ふ此内舎へ来せたまへ宵の間ハ流石が包すく侍りと言れバ。妊根よ〻手を放し怒ず面を和げ然ば後刻来る事。其時が否とお言を。満月を生るも殺るも你の心一ツが有ぬ契約と違る吏ふれとて。ほゝ邪智深き好根も恋暮の闇が心迷ひの若州が密言が欺れ丙舎へと出て。已が間へそゝくる。其後ほて若州ハ涙ぬぐひ書ゐ二通の文と手早く書ちらめて固く封じ年日意が合し侍女稲子と呼女

を密かに招じ私語て好根が無法の憲春を語り今ハ吾身此家に居らう。茅原江寺ハ先殿の忌日かりとて大安寺へ詣ろう何故や帰りの最遅くなれバ待て高議せよかし。なれど心せられて少時も此所ハ居られぬぞ。されバ你ハ此寝入くる若衆ゐて後門より人の知ざる様ニ大安寺へ行江寺ハ此文を渡してよ吾身も道せまろ。なれども二人ハ一ツ門を出ずも監僕の異しむ事もなれバ半時ばかり後此館と忍出大安寺へ到る事ハ江寺ハも其由の告ベし万一道ハて江寺が帰ハ逢とも大安寺へ引返して待よと告よと。満月丸が衣服ニ三ツ包ミて稲子の腰ハ結付させ。妹ま吾子を抱ひとして稲子ハ渡し其跡顔とき見送ハ不覚落涙ニなれバ。其涙満月丸が面ハ多忽ち見ハ覚し鳴くと泣出しなバ若仲殺まじ急ハ乳をさし付て含ませ徐ハ透ハそれバ又寝入くる。若仲ハ声ハて再び見ハ覚ざる内ハ疾く〳〵と急ハ稲子ハ心得て二通の文を懐ハさしバ彼御寺ハて待なん行時も早く来まの文へと耳結て遠〳〵立出後門と潜抜て大安寺へ後行ける若仲ハ其後影を稍少時見送りて潜並と涙ハ流ハ乳ハ福寺の鐘更ハと卿音て三更と報ずる小残ハ守刀を取出仏名十遍ハ紙ハ白刃を按把心下をさし串ハ遂ハ九泉の客と成ハ哀とハも疎なり。噫惜哉一茎の玉芙蓉悪鳥の為ハ散凋ハ東紅顔薄命と皆筆の吏を嘆ある哉。好根ハ又ハ争ハ知ぬ宵の過酒ハ促されて少時枕ハ倚一睡の夢ハ結ハ二更の鐘ハ尽ハ残て眼を覚ハ今ハ夜ハ更ハ吏ハ驚ハ若仲が待つらんと独言衣紋刷ろうて若仲の内へ入ハ窺ハ襖を引開て入ハ見ハ豈量ハ其ハ主ハ刃ハ串れて俯ハ伏四辺ハ血ハ染り血腥なる限ハ好根大ハ仰天ハ雖ハ呼ハ声ハ呼ハ侍ハ皆侍ハ皆ハ寝定りハ覚ハ何吏ハやと追ハ若



美濃の國
養老の瀧よ
孝子酒泉
我汲む



孝子小佐次

…や仲ノ丙舎へ送り行其屍を見て大ひに驚き侍女婢女皆声を放て泣叫び男子の輩ハ何のゆへ自害せしとも其訳を知ず乳母ハ心狂乱して惘果る斗なり好根ハ泣叫女原を叱懲し先刻より満月丸の見えざるハ不審し何処に居や捜し…と喚今さるぶぞ侍女稲子も家内に居ざれバ斯と

你と坐て若君と我お託しおくの御心遣ありと。憶世お難右列女お非命の死傷を進
せつゝ悼まれん。る貞操の女王お東易り。憎むべきハ好根殿なり。先君も追出
る程の無道人なれど。王君入唐の後留守の後見を頼れと言て来れ時お
信じがたく思ひ。正く王家の嫡男なれど辞らくて王君の帰朝あるまでと
思ひ留置しハ全く我過りあり。彼邪人始の程驚実らく見く女王と欺て王君乃
帰朝を遅く三年の月日を送りおハ。放蕩無頼の本性と見一弟の妻お横恋慕一心お従
ひ。若君と若君と切害せんとぐ人質を取て迫と脅一我お託て好根
殿の害を避。其身節操と破ばと自害一ありあ好根ハ眼前女王の仇なれバ今ハ逃
行て討取人吏難なおぐれど。家の嫡子なれど後日公の御沙汰如何あんとも量り
ぐ一。不如暫く復仇の期と延一。王君の帰朝一ありと待て今の恨と我晴一あんハ此上ハ
若君と守言なる社稷要なん。今ハ此まおて維と待ん何図ふなりとも身残忍びて

時節と待ん。彼好根と王君の家督と押領一。若君の所在と捜一と害せんとせ手ぎ
おおくれど。都近き所お置進せんと危しと。乳迫いまだ乳離もせ。ぬ若君と抱きて
遠図へ行人吏も難渋なり。先く手近き所お忍びて幼君の飢玉ハざる事と勘要あん。
やよ稲子今六泣悲むとも其甲斐有べく。歎き残止て落行人方と安ど出されと
言くれむ。稲子よ〳〵涙をおさ〳〵吾身の兄ハ平城近き笠置の里お住り賤き農人
あれども正直律気の性あれば。巨細を語て頼まゞ否とハ申さ一。且兄嫁去年産
をせ一由あれバ其乳汁ござて若君残音く進せんハ如何侍る事ぞとりおぞ江守勝
と拍是お増くる幸ひハ有べ。ずや笠置まで八五里お足ざる路なり。いざ終夜其兄乃
方へ行ありて。寺僧お礼謝と述大安まと立出て夜道の暗とも厭ざ両人幼主と
守て笠置の里へと剽往々る。好根が下知と受る武士等ハ脚と逸て大安寺へ
馳りく門と打敲きて菊原江守や居と問ふ門番寝惚さる声ありて。其と先別飯

多くと答へ僧ハ路の違ひて逢ざりしを以て我主の郎舎へ立帰り斯と好根を告れど好根心ニ異くおぼえ後日小暮よ出をや社あらめとて江守稲子の妻ハ先捨置家内の男女ハ口止して若仲ハ病死せしと披露して野辺送りせり夫より仲丸が留守手と称し心安部の家督と押領し其頃長屋王と称する高家有ハ天武天皇の孫ニ当れば威勢強く朝廷の御用ひも重かりしかば長屋王の館へ立入賄賂を贈りて阿諛ひおれば仲丸唐土ニて死亡せよかしと心中ニ祈りしが又時くニ満月丸の所在を尋探りて切害して後の患ひを除んと巧みしかど悪む者ハ却て愛する道理ニて

仲麻呂留学干唐土　於高樓餞別詠歌事

却説遣唐使副使以下四艘の倭船ハ海上障りなく唐朝の開元五年丙辰五月ニ明洲の港ニ着船し多治比縣守藤原宇合其他判官録事以下安部仲丸ニ及ぬ扨又僧主従ニ人ハ蜀江の錦の絶を着し珊瑚の笏を把て悠然と腰手懸られ其左右ニハ張九齢嘉訂観の女緑山楊國忠以下の大臣尽く錦綉綾羅の朝服を着し冠を平て威儀堂々と列り迎ハ眼を驚し壮観なりける時ニ玄宗帝縹官と以日本天子の即位を慶賀せられ種々の珍宝緡帛を献進ありければ倭國大使副使も縹官ニ就て答禮を述互ニ礼儀畢て後玄宗帝倭國の人々と沈香亭と号

やす詔め其后聘物を齎して王宮へ到り和親の禮式演聘物を献呈せしかば玄宗皇帝喜悦有て遣唐使の面々を華清宮へ召招せられける仲丸も倭使の後ニ従ひ席末ニ着て熟ら殿中と見廻るニ先正面ニ華清宮の三字を題せし金字の額を掛屏風障子種々の彫物多年を尽せりと覚しく視回もあやニ皆金銀珠玉ニ鏤め錦の帳綾の縵幕晃れるニ其余の荘厳結構心も及ぬ計なり仏主位ニ七寶の飾せし椅子ニ虎皮を敷掛て玄宗皇帝王の冠を頂き蜀江の錦の絶を着し珊瑚の笏を把て悠然と腰手懸られ其左右ニ

一別殿に待つ。大ひに酒宴を開く。郷人鹿ある仲九も此宮中のそのを看ん。華清宮よりも勝ること一倍なり。結構みて。殿宇の雄壮園中ふ珍樹異卉品くの花咲き爭ひ。寄石怪岩備ぎとふ物かく。席上ふ八金乃香炉ふ仍四維沈香を堆く盛て焼ふれ。馥郁たる香氣鼻を穿ち百般の玉器ふ山海の珍味を盛陳ね。瑠璃玻璃の酒瓶。琥珀瑪瑙の巵と以て美酒を勧め或ハ婢娼くる美女を多く召寄て妓樂を奏し舞綿めぐるハ真ふ仙境の栄花も是ふ争ハ増るぞと思ひぬ。唐土俵岡の主客とも百念を忘て樂ミ興ニ鰯の献酬とりぐなり。時ふ唐の文官張九齢つく仲九の人表と見ふ白面秀目動止法ふ合英戈色ふ露れくる迄ハ九齢多治比縣守ふ對席ある若冠の人を刺官ふ録事ふと問縣守答て徳書年ふ安部仲九と呼て吾朝の官人ふていひ。渡唐して学問ひ年の如き好男子ふ希なる言絶動止ふ其俊才見れさるふ。予ふ敏あれども又文学を好ふ僻あつて緒史百家ふ書籍を貯ふれバ。予が館舎ふ来め学友とあいふ。と紹ぎ縣守招び仲九と招ひて張九齢と拜させ九齢も礼を返し。互ふ交りの厄ごとを結ぶ。斯て雅宴數剋ふ及ふ衆人酔を帯れて盤を收ひ。仲九ハ張九齢が館舎ふ到り。寄宿て書経を学びぬる。九齢是を教へ導ふ事ふ盡ふ強記俊才の仲九あれば。一を聞て十を知解悟もる事早く詩を賦し文を作るふも佳句妙章多くる。九齢も毎度驚歎ひ是ハ唐の器ふおもふ。所有典籍の温奥を抑てぞ傳受くる。斯て其年も暮翌年春三月遣唐使乃人ハ唐土ふ残り張九齢ふ紆ふ有て淫雪の功と積学ぶ吏いまぐ數年ふもぐて頗る学業上達ひ張

九齢の学友王摩結・李白以下の詩人文人とも交りを結び詩文の贈答あどうくる多
皆伸九う秀才と感せぬハなうう。佐ども伸九ハ侍文ハ望なく。只一日も早く彼金鳥
玉兎集を写取て帰朝せんと。或時九齢ハ玉兎集を覓〳〵ル曲を絞るハ。九齢ハ白
彼書ハ朝廷の秘書ハて暦官とらべる妄りハ閲もる事能ハざ只秘書監乃〳〵
朝廷の典籍を預る官あれど玉兎集ハ看事を得るなうれ〳〵彼書のハヲ子が力
ハも及ずとの事と。伸九心中ハ甚ど憂ひ我過含入親王ハ撰出されし事余ハ奉
ハうて此上ハ渡リまじ。ハ望の玉兎集と見もる事ハ能ハざ。後ハ光陰と送る事入社
妄〳〵ねさまを天皇の待久〳〵思ひ〳〵ハ更ハ寝食の間も妄〳〵ず百般ハ思羅
もれ玉兎集と図まぐき方便なく。此上ハ伎ハ玄宗帝の臣下とあう如何もして
秘書監の官ハ到リ。彼玉兎集を看んものと思慮を定め張九齢ハ唐帝乃
臣下ハなう度由と告れバ九齢斜ハず悦び足下ハ早ク全の臣下とあう多

大いなる吾岡の福なうと。朝参して玄宗帝ハ斯と執奏〳〵るハ玄宗帝う
て伸九が俊才を李白ハ望ハ及ざれバ即ち望ハ任せて官禄とあう名と朝衡と
呼て近臣う。常ハ左右ハ侍せめ〳〵れる。伸九ハ心中ハ秘書監の官ハ任ずれん
との望あれど。万更ハ心をとめて事ハ
去〳〵ず。追〳〵官位と進められれども。
を閙て足を掻心地〳〵春よ秋よと送りて不覚入唐〳〵より十四年の星霜を徒〳〵
うど。伸九大ハ気を焦ち斯てハ何年う
事と祈りるハ其ハ誠心や通ど。玄宗帝遂ハ伸九と秘書監の官ハ任ずれる
ハど。伸九天ハ上る思をなり。是より朝廷の書籍と預り。多年望〳〵金鳥玉兎集と閲
もる事と得う。其ど大切の秘書あれど字〳〵取事能ど只管熟読〳〵悉く暗
記ど。今ハ望と足ぬとて夫より帰心箭のど。玄宗帝ハ表を〳〵致仕と願ひられど

唐帝敢て免されず。又官位を進めて左補闕と
ず。仲丸已吏を得ざる又一年をぞ徑ける。去程ふ本朝ふて八元正天皇養老七年ふ
宝位を皇太子豊櫻彦皇子ふ聖武天皇譲らせ給ふ。卽身ハ太上天皇とあがめ奉るが
安部仲丸玉兎集と借求んとふ入唐し。已ふ十五年を歷ども今以て歸朝せざ何ふ
音信もおこたれず。藤原清川を遣唐大使と大野古人を副使と。判官録事
我相添て入唐させ給ふ。仲丸と日道して歸朝をぞと詔命し。清川奉りて日
本の地と舩出し海上滯なく唐土へ着舩し。長安の都ふ到り。王宮へ參りて聘禮
首尾よく相果ぬ。仲丸ふも對面し太上天皇ふく待よび給ふ。今度五ど歸朝をる節
日舩とて歸國しの給なり。其準備せられよと告其日ハ別て旅館へと皈りぬる。甚喜
仲丸ハ清川が旅館へ到り對面して曰小臣天皇の勅詔を奉りて入唐して學問と名と
金烏玉兎集と閲せんと欲をれども。唐帝の秘書あれば容易ふ看吏能ざるふ
よて仮ふ唐帝の臣下とかり。秘書監の官ふ進彼秘書を庋取んと千苦万労する
事十年ばて秘書監の官を得て玉兎集と看るとりども朝廷の大秘録なれ
どもは僚のおる折ふ写し取又おうぐめ膽ふ彫て暗記ふ今ハ歸朝をば法ら
秘決と奏聞せんと唐帝ふ致仕をとも敢て許されず官を進め禄を加て抑留
せらるふ依已吏を得ず又一年の月日を送れり。貴卿明日唐帝ふ見へ我と日本
へ歸さる事願ふりへそ。袖中より五言律の詩一篇を把出して清川ふ呈しぬれ
ど清川承諾して詩篇を收め翌日華清宮へ參りて歸朝の辭をを次ふ仲丸が
詩を呈し。安部仲丸学向修行のため大阿へ渡り久く留学して多く帝恩と蒙
りぬる事万緒なり。然ふ日本天子仲丸が歸朝をると足疾翹て待ふと多年ふて
此度臣ど貴國へ參りぬふ付必ど仲丸が辞を願ひて歸朝せよとの詔命ふてぬ
万望仲丸と倭國へ歸へと願ひぬれば玄宗帝先詩篇と開ろふ其緒ふ曰

銜命將辭國　非才忝侍臣　天中憶明主　海外憶慈親
伏奏違金殿　騑驂去王津　蓬萊鄉路遠　若木故園隣
西望憶恩日　東歸感義辰　平生一寶劍　留贈結交人
帝甚嘉感之　清川乃任使　仲九懐古郷　慕之情不憐
遂亦歸朝
辞を許されぬ　清川大に喜び　仲九を呼出して　唐帝に拝謝せしめらる　仲九涙を
流して年来の鴻恩を謝し辞別を言上すれば　玄宗帝多くの珍器綵帛金銀
と餞別に給ひけり　斯て仲九帰朝の願叶ひて　悦び勇み　清川以下と倶に旅
館へ到り万の準備を調へて衆と等長安と發足　明洲の港へ到る日兼て仲九
と交を結し張九齢　魏萬王維　李白なんどの名士　仲九が出船と見送らんとて
出来り　官舎の高樓に登りて餞別の酒を酌み　一列伍跡を惜みて作る詩曰

送秘書晁監還日本

王維

積水不可極　安知滄海東　九州何處遠　万里若乘空
向國唯有日　歸帆但信風　鰲身映天黒　魚眼射波紅
鄉樹扶桑外　主人孤嶼中　別離方異域　音信若為通

送日本國聘賀使晁卿東歸　朝と晁通用

上戈生下國　東海是西隣　九譯蕃君使　千年聖主臣
野情偏得禮　木性本含仁　錦帆乘風轉　金粧衣照地新
孤城開蜜閣　曉日上車輪　早議本朝歳　塗山玉帛均

其余略を斯て酒宴長く日々西に没て月東天に澄上り殊更一天に雲打ち月影
面白うなれば衆客眺め興ずる仲九心中に古郷三笠山の妻を思ひやり家に
残せし妻若仲が平安の産の級や解なんと都を出し時も別を歎くをや　十六年の
春秋を倭國唐土に隔住をさこそ寝覚も待ぬらんと思ふぞ弥帰心胸に迫りける

澄上る月影と妻の三笠山の郎舎とを見んとて一首の和歌とど詠じける

天のはらふりさけ見れば春日なる三笠の山よ出ー月かも

とど口號れむ。清川吉ア呂以下の倭人をあつて感じ通秀逸なると誉れども唐人ホ
も倭歌と知ざれど如何なる意ぞやと問ふ。仲丸漢絶を以て如此ー〳〵の意味なると
註解ーて安せくるまで詩人ホも深ー〳〵感じくり。斯て満座酔と尽ーて酒宴と収め唐
人を別を告て帰り倭人を船中へ入て枕ホ着くり。偖翌日風ホ好くられど四艘の和船纜
を解て船と乗出ーくる仲丸ハ録事紀何某が船ホ乗風ホ任せて大洋と走るわどホ
三日ばかり海上穏なりくる。四日の申の刻過俄ホ悪風吹起リ怒浪天と浸ー
大雨降出ー雷電鳴ひゞきれ船と淘上淘下をおそ船子ども大ホ驚き地方へ乗着
んと身を揉うち四艘の大船散ー〳〵ホ離ると海上ホ漂ひゞ仲丸が乗くる船ハ幸ーて
安南國へ漂ー着ー清川吉ア呂が船ハ九州種ゞ嶋へ流ると着夫より都へ上りくり到官

り船ハ如何なるや行方と知者なし。斯て仲丸が船安南國ホ着ー所ホ此國人ハ
禽獣ホひとしく。仁義と知ぬ猛悪の者どもなれば大勢器械と携乍て群来リ船中
ホ渡ー入くる下司船子ホと悉ー撃殺ー。仲丸と紀の何某両人ハ縄ホて縛リ船を
りて更なり船中の粮米衣服器物ホいたる迄残ど余ち奪ひ両人の虜と曳ー
城へ帰リ國王と覚ー紀者の前へ曳居ゑり時ホ國王左右の者ホ何り令ーて両人を
已ホ切害させんとをるホを仲丸声を厲ー我是唐帝の近臣左補闕朝衡なり
你ホら我と害せば後日必ど唐帝の怒と受て伐を蒙るべーと言ーれハ彼國
王鋼刀と持ー者ーて制ー両人の縛と解者ー下宜ホ命じて仲丸と紀氏と國賓迎送
リ出ーくる是ホ依て仲丸ハ危ー一命と全ー再び唐朝へ帰リて帰朝の便と求んと
紀氏と日道ーまゐぬ夷垂の國へと往て多く艱難をるゝら紀氏ハ辛苦ホ堪ゑ
終ホ路上ホて病死ーたりくる夫より仲丸ハ独歩ホて唐土へさーてど尋行くる唐朝

ふて、朝衡が船難風ふ遭て覆り朝衡溺死せりと風説ありければ李白其死を悼みて

七言絶句の詩を賦して哀む其余の詩友も大ひふ惜み歎くる事一年ふりて

日本晁卿辞帝都　征帆一片繞蓬壺
明月不帰沈碧海　白雲秋色満蒼梧

李白

仲丸存命して唐朝へ帰りなんを皆首を延て待ける事ふ候

帝も即歓あつて再び左右ふ侍せめんと欲ふ会ふ玄宗帝の嬖臣安禄山を佞奸邪悪の賊臣ふて揚国忠と心を拝して玄宗帝を弑して唐の代を簒んと兼て逆意を企るふ。仲丸八千略万人ふ秀且又勇気胆力の英雄ふて常ふ帝の左右を去ざれば大望の妨と思ひ煩ひるふ。幸ふ去年帰朝せんそ同の上の痛を除ん心地して悦びるふ今年又帰きらんて帝へ再勧るふ安禄山大ひふ仲丸を忌悪ふ賀ゆて追退けんと邪謀を企て一ツの奸計を案じ出ひ揚国忠ふ向ひ足下朝衡ふ逢て如斯く〳〵説のよと私語れば揚国忠默首て仲丸ふ面會ん足下八昨年の秋帰朝せんとて出帆せられふ其後街の風説ふ足下の船難風ふ襲ひ海底ふ溺死有ん由専と言觸るる也。我も安禄山も大ふ惜み悼むふ不斗存命ふて帰られ八朝廷の幸福ふて我徒も悦ふ不堪依て一宴を催ひ賀を表せんと欲せり幸今中秋ふて明日十五日なれば凌雲臺ふて足下を賀するの賞月の宴を催すなり万望来臨せらまほしと切ふ誘ひければ仲丸其奸計の成敗ふも考ず。拝謝して曰不肖の小臣を愛ふもて賀酒を賜らんと仰ふ我争ふ背んや明夜必ず推参して末席を汚すべしと諾ふて揚国忠仕と手を別ち安禄山ふ斯と報ずれば、ほく〳〵縁成ぬと悦び其準備をなすふ程なく十五夜ふなりければ安禄山揚国忠ふ凌雲臺ふて高楼ふ酒宴の設をなし使者を以て仲丸を結び大ふ

酒宴を開き山海の珍味を尽し妓樂を奏して管待す。くるも仲丸程の智者も
運の尽る所や是を毒針とも悟らず倚量を過る程迄と重ね大の小酔
と帶て勾欄に倚りて振仰で天を望めば一天快く晴て一朶の雲もなく名も
良夜の月山の端を放て高く澄昇金波眼を射て羞明ぞう影さへかり仲丸も
晴光に向ひて心中に思ふ様去年明州の港にて学友と送別の盃を取しは天の原
の歌を詠せしも今宵の如く晴光もなく其砌雞風に遭ひて疾く帰朝して此
名月を古郷の三笠山にて妻子と倶に賞せんとのみ尚人の風に憂光陰を送る
妻よと嘆息し愁思胸に充塞り欄に頬して世を恨み身を悔くるに酒気
乃為に眠朦朧不思少時間睡々るに秋風の衿元へ吹こむに驚き見れば我が不敬を
せりと身をそこで席上をそれなど見れば盃盤の狼藉る斗にて安禄山楊國忠をもしめ
す。其他酒宴に侍りし者數を悉く童子さへ居ざる其身の影の余人影絶て無

まこうも仲丸大いに紛り何事の有て皆樓を下さぬと独言一待ども〳〵来者人ぐも
登り来るまで余が待つびて手を拍鳴し既に高声を維彼と名を呼ども絶て答る者
もなく廣くなる高殿に其身只一人のみなれば寂寞と物凄敷列し銀燭も漸く消
消えども蝙蝠と見えて来んともせざれば更に不審晴ぬ此上は我も樓を下んと攀ぢて
階の際へ到りて見れば階を引て下せる跡なり。大に驚て
此方の掛の方へ行て見れども是も引ぬ倩遥〳〵此所彼所と徘徊ども更に下るべ
き方便もなく。原来此凌雲臺は高さ三十丈ありて棟の夢は雲に沖るに昔の樓
成就せし時如何なる妻まや未だ文字とも書ざる額を高く擔ぎ掛さる是が依く
時の能書と雖も入高く額の際なれば鈎上て凌雲臺の三字と書せ筆畢て後春
花鬼卿しらるゝ髪鳥ろ〳〵の盃を出る時は衆く白髪となりやと
紹卫是額迫く鈎上られ時下の遥ぬ遠れど暗見心途迷とも深く怖ぬ鬼の髪



鬚とも白く萎せありける高樓へ欵登せ所く指と引れむ翼なくて六ちん
せうもなく茲ホ於て仲九始て心付侭ハ安祿山揚國忠我と此高樓へ驕ー登ることめ
指と引く餓死させんとの奸計なりくるゝや其とも察せざる過て郤縁ホ陥ー悔ー
さよと躍上り足搏つ牙を咬で怒り悔ども今更詮とも無術もなく天と仰で
長嘆ー噫非運ある哉我適勅命と奉りて三千余里と隔ー異域へ渡り彼君
術の書と得んため異國の王ホ瞞と屈仕る事十六年君恩を重んじて家と忘れ妻子
残捨辛して望の秘書と心ホ晴記せ千苦万労も水の泡と消今此樓上ホ餓
死せんとそも天ノ命う倭國の八百萬神も仲九ず哀忠と見捨るやと身の悲ー
ホ神祇を恐て無念の牙と噛鳴ー両眼ゟ流る血涙ハ二條の滝のごく彼古
の旺の大臣ゞ燈臺鬼の恥辱と受ー悲ーさも今身の上ホ思知れ恨た怒ゟ衣服を
骨ゟ其夜ゟ十万無量の悲と泣明ー翌日ゟあんども樓上へ上り来る者もかれゞ

独俟國の方と望ー天とぶ鳥の羽と羨くて凋悴る幷なりゞ稍飢ホ堅れバ
器皿ホ残ー肉菜と食ー一日二日と数ゑ暮ー泣明ー果ハ喰物もかるゝと
なれたる屍風障子の紙を食ー左右と十余日と過ー漸くホ身体痩衰へ
氣力弱ー心神暗くなるゟ強て気と属ー我日本と出る時舎人親王ホ誓ー
言もありゟや此樓上ホ飢死まゟ一念の悪ハ幽鬼となり再び暦書へ求ん
と人唐せる人を補佐ー彼王兎集ー倭國へ渡でハ已ゟ今ハ空く餓死
をる残骸ぞもなく舌咬断て相果んせゟくハ去年泳ぜ歌へ妻子ゟ紀
念ホ書残さんと血辺と足ー筆墨も不有た下襲の白衣の紬を引裂て
右手の小指と噛切其血汐と以て白衣の紬へ

天の原ふりさけ見ゝば春日なる三笠の山ホ出ー月ゟ

と書終ー遂ホ舌と食切て死ゟそ生年三十三才なり我日本の一英雄不幸

みて其志を遂ざ空〳〵望郷の一思ふ成〳〵更惜むべく嘆ずべし。後ふ
吉備公此天の原の歌を倭國ふ傳へん貫之が選〳〵古今集ふも西鶚旅乃
部ふ入ふろ〳〵ふて月我ふそよめるふ紀書ふ添〳〵慈鎮和尚も此天の
原の歌を本歌ふとりて

天のふりさけ今や三笠山も出て澄る月影

と詠せ〳〵又貫之の書〳〵土佐日記ふも。仲丸が唐土ふて三笠山の月の歌をよ
よふ載ふれど仲丸屍を異國の七ふ歸〳〵れるも。名ハ倭漢書史ふ留〳〵

聖武天皇御受禪　滿月丸生　従討好根條

却説本朝ふてハ聖武天皇養老七年ふ御即位まし〳〵人皇四十五代の帝と
仰ぐ。御諱ハ天璽國押開豊櫻彦御父ハ文武天皇御母ハ藤原の夫人
と申淡海公の女なり養老八年二月御即位の大禮を執行ふ神龜元年と
改元ある。是去年十月紀臣家の女者白色龜ふ献じ故なり。斯て先帝正元年ふ
太上天皇と尊稱せまつりね。神龜六年ふ改元あつ〳〵天平元年となる。
ハ二年太上天皇仲丸が入唐してより。已ふ十四年の星霜を歴ども未ふ歸朝せざる
我待ぶびるハ年ふ藤原清川を遣唐使として入唐させまつる。就仲丸存命あり
ば船して歸朝さべしと思ふるふ羽ふ年天平三年清川占ふ官以下歸朝ふ及ぬ
て。安部仲丸をも日船ふいへども。海上ふて大雜風ふ遭て九州種ふ嶋ふ着
いへども仲丸が乗ふ船と録事の船ハ更ふ行方を不知と奏聞ふるふ。當今も太
上皇も深く驚ろせまつる。如斯ハ仲丸水死せや又存命をや。其生死量知ふ。此上
も再び智を勝ふ〳〵者を撰ふ入唐させて。金烏玉兎集を需させ。日本ふ曆道を興き
いへと。舍人親王へ勅紹ふるふ。舍人親王勅命と奉ふ。歸舘の上其機ふ中る俊
ふの人を維彼と勘へられるふ。當時仲丸が才ふ劣ざる者ハ下道吉備ふ限ずと

即ち使者を以吉備を招かれる。吉備公八俄ふ攝政家より召るゝハ如何なる御用
ぞやと不審晴れど。即時ふ衣冠を改めて。使者と倶ふ親王の館へ參向せられ
ける。因ふ曰。吉備公此時の名眞備ぉて入唐して曆書を需得て歸朝有しゆへ
吉備とのゝ名を賜りしとも。眞備とのゝ名ハ婦人尚あるのまゝ雜ゝとせ
ず始より吉備とのゝ名ハ。譬ば淡海公八沒後の綵ぶて。存生中の名八不比等あれど
も益のひてき。實ふ難有事ふ。
斯て吉備公奏上の由ゆへられ。客殿へ繕ひて親王對面あり。儲吉備公ふ仰ふ
只今招れ八私の義ふあらず。先年曆書ぞ求ぬんふ。安部仲丸と入唐させの
所仲丸唐土ふ留学をる事十六年。仍ふ唐帝の臣となり。遂ふ玉兎集を閲し暗記ど
る事を得ゝ。遣唐使清川と倶ふ歸朝の船ふ乘れども海上ふて雜風ふ遭仲丸
が船八覆りや不申。其生死定ふあらざれ故ふ省略ある者を撰ゝ入唐させ。仲丸が生
死を問れ。存命をるなれ日伴て歸朝。若死せざるあらず。唐帝より彼金
烏玉兎集を借求疾歸朝させむとの勅命なり。尤今般八仲丸の如く年數を重ね
ず兎角三年を限とそべと紀命しゆへ今朝廷ふ此御使を奉りし者恐
らく卿の他ふ有べうず。國家万民の為なれ勞を辭せず唐土へ渡り彼曆書を
借得て速ふ歸朝しめよと有れ。吉備公低頭平身。無餘不才の臣群臣乃
中より御撰出しふ頭りくる。大切の勅使を命じむくる吏身乃大慶是ふ過ず臣
短才あれども彼土ふ渡り機ふ臨く變ふ應。其玉兎集を得て歸朝仕る事掌
領掌ありなふ。舍人親王も御喜悦あつく。益ゝ立歸り隨從の人數を定
ゆ出給ゝとて御暇をゆりられ。吉備公拜謝して退出。即舍へ歸りて妻
子家人緣眸の人ゝふも宣旨の趣を給り告せ事ゝ入唐の準備そ急ぐれる
且説仲丸の雜掌菜原江守八王君の内室若州が遺書の附紙ふ應ゝ侍女

稻子と倶に満月丸を守護して平城を落。北笠置ある稲子の兄が許へ行。王家の要を絡り満月丸が身の上の義を頼くるが稲子が兄公農民なれとも。義を知情ある者あれを一議も及ず承引て。王後三人を舎蔵。幸が妻が去年女子を産て乳も餘あれば。其乳を以て満月丸と言させるが。江守が大の心を安んじ。是より其身も鋤鍬を採て王とともが耕し。耘り稲子が満月丸を守傳く。行末が嫂が縫績の業を扶け。左右して春を送り秋を過し。仲丸の帰朝を待とも其風説もなくて却て女王の仇ある安部好根が長屋王が媚縮ひて朝廷の臣下の端より列り。仲丸の家督を押領し。富栄るとの風説が耳が入れば。江守が無念の歯を切だり。神佛が祈願をかけて。仲丸が帰朝を昼夜祈とも念帰朝の音信が絶。ろう憂年月を暮て。満月丸をでが十七が成るまで。江守が昼の耕作の疲労をも厭ず。夜く手跡素読などを教導れ。十二才の年より弓矢剣術等を教るが流石仲丸が倅とて満月丸成長が後ひ智

恥が勝れ。生得聡明頴悟にて。手跡学問ハ日が及ず。弓矢撃剣の技も上達一ヨが十二才にかなり。今ハ師る江守も及ざる事多れハ。江守稲子も感じ悦ぶ更限なし。

仲丸が乗し船ハ覆りしとも風説一又ハ行方も知ずとのいて一定あれども。其生死定ならず。されば。江守ハ大が望を失ひ如何をせんと書を求んとて入唐ある人に街が絶歌をるが。江守今ハ堪ず。満月丸と人あれ所へ招ひ。低吉が告るハ兼て時く申上如く御又仲丸公ハ勅命が依て入唐ましのいるが是御身のまゞ生れむる処前の妻が早十六年の春秋をとも御帰朝の音信も却て去年遣唐使帰朝の船が月船して唐土を出のいるとも海上が難風が遭のハ御又仲丸公の船ハ覆りしとも又ハ行方もれとも風説ならず。茲が依て吉備公入唐の宣旨を蒙りしが当年中が出帆あるよう是又治定なりと言触しへも。御身も吉備公が願ひ彼卿

の奴僕の如くなるとも。入唐して御父の生死を問極めの上ぞ。夫が款御身ゆゑ進退を一品あり。今迄ハ書し子細有て包隠しぬぐ。是ぞ母公の御紀念ぞとて懐中より彼若艸が来期の際ゟ書残せし文を取出して渡しぬれバ満月九歳死。先年我母を如何成のよと問ひ命只病死有ゝと乃ち答て御遺物有とも言ぬやとぞ恨ぬれと言つゝ封押切て續事一遍一読。殊更江宇ゟ對の此御文の紙表ゟ裏迄細かて我ゟ母を死るの成人の後ハ跡を懇ゟ吊へよと書のを你ハ病死有ゝとひ一ゟ此文の詞ゟ自害しの事明白ゟやせよと迫今て問るぞ。江宇ハ今更其時の我傷と思ひ出一不覚の涙ゟ揮ふ。満月ハ理リ知て御病死とゃせハ偽言ゟて欺ハ御身の三才ゟかりの年主君の兄好根とふ無道入御身の母公ゟ無体乃不義を言ひ従ぎぬ幼死御身を害せんと言怖せしゟへ万一其紙のごく御身と書る妻ゟそと暗ゟ稲子ゟ御身を懐せ其御文と我乃御遺書と添のして館と潜出させ。御身の養育の義と愚臣ゟ統一其身ハ節操を守て母ゟ仕のゟ夫迄稲子と高議一君と此郷へ伴ひ進らせ稲子の嫂乃乳を以て育進らせ。伸先公の御帰朝あるを待ゟ甲斐あれ年月を君ゟ人心付ゟ年ゟ成の人ぬ母公の横死の吏告進せんとハ思ひぬへども悪ゟの余ゟ口外しの自然伯父好根殿の耳ゟ入御為悪ゟ妻の出来ぬべと慮り縁と今日ゟで告知せゟぬ。然ども吉備公の随従と入唐ゟ御父ゟ御対面あの時母如何と問ぬの病死あゝと答ゟ無念ゟれ。斯実情と明一かゝと絡ゟ告知せざる。好根の所為ゟて非命の死をたゝのゝ事ぞ。好根ハ倶ゟ天を戴ざる母の仇乃ぞ。一太刀恨ん之と孤出ゟ我。江宇ゟ塞りて制一止。先血気ゟ逸りのゟゟ好根今ハ安部の家督と押領一。朝廷ゟ勤仕ゟれバ家人ゟ多く

いかゞなれど。有活か向ひむかふ本意を遂のそを能と却て御身危くるべし。謀をいて其不意我多ふハ不如と練ら給ふなれど。満月丸漸〳〵逸る心を鎮め。おとゞ如何〳〵水意を達をゞれと。向江守が曰古への讒譖ハ身小添さと。瀬病とかり主の執を狙ひしとやさればそ其謀ハ做ひ君も小臣も面を塗汚し。身ハ縦衣を纏ひ小人の体すがたを仮装し。春日野を徘徊して好根の出入を窺ひ。便宜と見合せ名告りけを勝負担ひる。且統妃根ハ安部の家督と押領し。長屋王の吹挙ふて朝廷の公用を奉る身とかり。今ハ雑喉らず心の侭ふ挙動るゞ。或日已が幼老を祝せんと。同寮の輩五六人を招請し。宵より酒宴催して管待す。好根ハ主客とも泥のごく乱酔し。今ハ席も堪ず。果ハ主客辞を吉て。浪滄とて立帰りける迹。好根侍女に小盃盤を収させ。已ハ席上に酔仆し前後も知ざる寝入る。満月丸主従ハ宵より刃とろ〳〵て窺ひ。二更過る頃まで、ハ男女の笑語囂〳〵と喧く聞ゆる。東大寺の鐘三更と報て後ハ寂寞〳〵として物音静まりぬれば。今ハ家内の者どもハ皆散るゝあいだ。忍び入て

是天の与へる時節なりと悦び。満月丸と議して曰。好根今夜客を迎て酒宴されど必定客帰りて後ハ已も酔草臥て熟睡をべし。今六月炎暑の時なれば雨戸を鎖ず及ど涼風を迎んと設をる吏治定ならん。物音の鎮る我待て裏の塀を踰忍び入て討取べしと示合す。郎の後門際ハ空寝して内の動静とゞ窺ひる。好根ハ是幸敷もあらぬ。宵より客を迎て酒宴をはり。妓婦ハ琴笛弦絃をまぜ。風ひつ舞つせつ。興を添て管待す。客ハ漸〳〵酔ひ楽しそ二更過る頃まで酌かはし。果ハ主客とも泥のごく乱酔し。今ハ席も堪ず。未客ハ辞を吉て。浪滄とて立帰りける迹。好根侍女ハ小盃盤を収させ。已ハ席上に酔仆し前後も知ざる寝入る。満月丸主従ハ宵より刃とろ〳〵て窺ひ。二更過る頃まで、ハ男女の笑語囂〳〵と喧く聞ゆる。東大寺の鐘三更と報て後ハ寂寞〳〵として物音静まりぬれば。今ハ家内の者どもハ皆散るゝあいだ。忍び入て


満月丸
よーいしょ


千々ノ江守
仲磨の一子
満月丸盛長
母の仇
好根ぜ
撃つ

鷹脫捨て帷子の上ゟ王手繰り付。覺の一刀を帶て身を固め。江守素り案内知る
古王の舘あれ。堀外の松樹を攀上り。高堀を乘踰て雞あ忍入。門の扉
我開ん主を殊入潛歩して座敷へ往んと。葉のごく兩戸ゟ鎖て好根ゟ閂乃
ごとく鳥を鳴して驚醒ん。滿月丸ハ江守と目と見合せ完示と共笑兩人
其枕頭へ立寄。江守牀を裏くと踏鳴し。如何や好根殿眠を覺しそ。
在ん。仲丸公の御舘滿月丸殿なり。御母若狹公貴殿の無体の戀慕を厭
ひ自害して果給へ。其供を復ん。此年月膽と嘗薪ゟ仕て待ん時来つ
此夜見參ん事を得ん。起上て太刀を合されよと呼ん。好根此声ゟ驚て
岸破と刎起太刀掛の太刀ゟ取て勝ゟ帶。是ハ胡乱ある仇呼ん。若狹ハ我切
害せ。ゟあらざ。何を以て我故自害せ。とや。陳ん果させじ。噫卑怯ある
ん事哉。主ある女君ゟ不義言ん。無道人所業ん無益なん。若君疾恨

我報ん。と。ゟ間も遅しと滿月丸ハ言の問答ゟも及ず。刀我閃して斬ん
ゟ。好根大ゟ怒り。ゟ太刀拔合して鍔流。三合闘ひ。ん者ゟ出合よ
狼藉者入ん。と呼ん内ゟ江守も太刀を振揮。主を扶けて階迄ん斬ん
好根ハ強勢の漢ゟあれ。ゟも。宵の大酒ゟまだ醒ざる上。不意を伐れて氣弛延ん。脚
透逸ん眼定ら。ず。二人の敵を支ん。己ゟ額と肩先ゟ疵を負血汐眼中ゟ入く
倍眼力を瞞ん。憤發して滅多斬ゟ振回を太刀鋒ゟ。江守も小鬢ゟ一ヶ所の疵
我受ん。も吐も屈せ。ず切進ん。此時好根ゟ家士三人奸。主人の呼ん声と太
刀音ゟ聞を覺し。追取刀ゟて萬着見ず主の好根ハ二人の敵と朱ゟ成て闘ん体ゟ
大ゟ疲ん。銘く拔連て助太刀せんと。江守斯と。ん。ゟ好根ハ滿月丸ゟ手ま
主塞て大声ゟ。你ゟ手を動ゟと支ん。是ハ唐有し。仲丸公の若君母君乃仇家
乃仇ん。ゟ好根を恨ゟ。你ゟ無道の好根を扶ず真の主君の加勢し進せよ

と呼れぞ。家士忠八好根が新参を扶知る新参者あれど。耳あるけぞ三人叱く
江寺ぉ切てうるむぞ。菜原大ぃ怒リ。三方ぉ敵と受秘術を尽くそ闘ひつ。互ぉ斬
つ切れつ倶ぉ薄手重手と負るぞ。江寺ら老体の上ぉ數ヶ所の手と負どぉ。忠義ぉ
凝くる太刀鋒励く。己ぉ一人を切仆ー。二人ぉ重手と負せれど。不叶と思ひ。
捨て走来ー方へ逃行う。江寺ぉ心ぉ猛ーとぞぉ。弱く乃手ぉ眦ぉ眼圏ぐ。席上ぉ仆れ
つ。太刀と杖ぉ喘君ぐる是より前ぉ満月丸ぃ心ぉ母の仇を復さんと。大兵の好根と怖
れど飛鳥のごく働れてぉ太刀あぐら好根が肩尖鳥股左右の脇ぉ弱くの手と負せ
れバさーとぉ曲者堪ぅ。後の壁へ仆ぅそ屍居ぉ倒どぉ。満月遠さず付入て
突ぉ置うけて切伏つ。遂ぉ首とぞ討取る。江寺ぃ前より苦痛と忍て見居るぉ。已ぉ
満月丸が首と上ー。父ぅて大ぉ悦び。憖手柄ー。今ぞ母君も安ぉと晴ーぬ。ー
人疾く堂置へ帰リ。其首と手向て母君の霊と慰め。吉備公の館へ参リ入唐の暇

従を願ひ。父君ぉ對顔。老拙ぃ斯數ヶ所の手と負ひぃ。御供仕リぃ。夜の明ぎ内
疾く立退の。と言置。忽息と絶ぉり。織ぉ江寺が苦節忠烈再有ぅ。ぢ。
満月丸ぃ江寺が死と悼く歎けど。死骸と隠さぐ暇もなく。涙ぉぐう其髪ぉ切
取て懐中ー。好根が屍の袖と引裂て首と包ぐ。後門より立出るぉ追来る者ぉ無
リ。ぢ。後安く堂置へ帰リ。稲子兄妹ぉ携仇の始末と結リ。若州が霊と祭
て好根が首と手向。江寺の髪と稲子の兄ぉ頭ぉ。沐浴して後思ぉ昔や有ん。腕と
刺く血ぉと絞リ。其血と以て一通の文と書紀懐中して又平城へぞ赴きぬる

満月丸呈吉備公血書

江南子母銭之事

却説吉備大臣ぃ入唐の用意ぉ整近ぐぅぉ啓足せんと。其准備をせらるぉぞ。
寮の公卿一門の人ぐより餞別の音物と贈る使者門前ぉ市とかー。客殿ぉぃ送別の
賓客絶間ぅく。日ぐぉ別離の酒宴と催ー。誰の内にて賑リぐぅぅ。或夜吉備公ぃ

未客去りて後夜稍更ふれども枕も就さう〳〵入唐の事を思ひつゞけ彼金烏玉兎集ハ唐帝深く秘藏あるよし容易ハ得ざるべされど今度の入唐こと身の二大事かならずとて深く思惟を凝らさるゝ頃ハ夏の季ゆゑ庭の秋草も是彼花咲出九五夜の月影も物哀なる折しも庭の樹蔭より怪しや二八の者を出吉備公の日前近き庭の面に坐し身を平伏て拜をなすゆゑ大臣甚だ異しく思ひ。深夜ゆゑ此庭へ来れるハ何者ぞ。狐狸の類の予を惑さんとの義ならんと手ハ太刀掛の太刀を把て。柄ゆ手をかけ咎めらるれバ。彼者頭を擡げ先逸まをせのみな我ハ変化の類ゆてハいなご。是を先年宣旨ゆ依て入唐しゝ。安部仲丸が一ゆ満月と呼る者ゆて候父の入唐後出生しゝゆ。伯父好根と申者又ゆ留守中家族と共に家督を押領し我母ゆ無体の不義をかけゆへ。母ハ其と厭ひ小子を家士ゆ託て郎を落させ。

身ハ操を守り自害して空くなりゆしが父ゆ成人先頃母の仇伯父好根を討て八へども又ハ今以て帰朝致さず。此身ハ日景おて成長ゆへ。朝廷へ訟て父の家を相続仕る便もなれば所君ゆハ勅命ゆ依て入唐去のよし承り。何卒御見参となし入唐隨従を願ひたり。愛思ひ給へども。琴落一身ハ維ゆ吹笙を頼んまもあり。十余日ゞ間百般肝膽を碎よう〳〵厨人の小者となり貴舘へ参る便を得今夜尊顔を拝しなり。万望小子と奴僕となり唐土へ召連れ父仲丸ゆ對面させ給ゞで生世の鴻恩さるぐゆと。涙と倶ゆ願ひける。大臣まて打驚ゐ。偖ハ仲丸殿の賢息ゝ。是ハ思ゆよらぬ對面ゝ。先〳〵是へ〳〵。辞退する我強て席上へ呼上。今物語れ趣おてハ強絶乃内より左ゝを艱難せれバ。幼若の身おて母の仇と復し尚遠く唐土へ渡りて父君を尋んの至孝ゝ。神妙なり。左程まで思ひ給れバ孝心ゆ愛彼土へ

伴ふ中度あれども奈何せん已ふ入唐の従者没くの奴隷まで入數を定め悉く名を記して攝政殿へ言上されで卿身を自道せん吏意ふ任せざる書信ふど主父君へ贈られんをおくぞ。言頂りて彼土ふて父君ふ面會せざ届け進さぞ入唐の義ハ思止られ。仲丸殿存命あるぞ。如何なる故由あるも予ヨ伴ふ帰朝ー。父子の對面さ世中ぞ。予帰朝をするまでハ此館ふ居て父子對面の期を待いと。情厚く仰ふるぶぞ満月九大ふ望を失ひ偖ハ入唐の御供ハすひいはぎと兼て拙き文書を書紀置ハ悼書くいへども。ふ父御對面なるぶぞ。是を届け給りふへそ。吉備公の前へぞ呈する。吉備公満月九が幼若ふ其用意の深きを感心あり。流石仲丸が子なりとそ。封書を取上灯ふ照して見れるふ

将く血淚を以て表紀しあれぞ甚ぞ不審く思ひ満月九ふ向ひて。御身浪くして筆墨ず意ふ任せざる。但ハ思ふ旨有て此文を血淚ふて書れるぞと問れるぞ。満月九涙を浮め流浪困窮の身ふて墨の支覚ハ左もなり。況ふ熊と血汐ふて書紀いハ三千余里の波涛ハ隔るも親子の契り浅せざぞ。父乃手ふ渡りの後ーと思ひ血汐を絞り書いなりとぞ答る。吉備公ふて感涙有ばさら実賢くも心ばれ。父子一躰の血脉ふれば。三千里ハさもの。幾億万里を隔るも父君の手ふ渡らん吏何の疑ひかあらん。漢土江南ふ青蚨と云虫有て蓑ふ子を生り。人其虫子の血を絞り取て銭ふ塗て貯へ置。又虫母の血をも絞り取て別の銭八十一銭ふ塗て貯へ置。然て虫母の血を塗る銭を以て。市ふ出て物を買ぞ。其銭人知ざる中ふ虫子の血を塗る銭乃許へ飛回るぞ。それを古語ふも患豈貧哉と謂り。是母子一躰乃

血を慕ふ故なるぞ。御身が此血汝の女も彼子母銭のごく。心を仲丸殿の許へ
達さゞべし。噫足下の孝心の深き吏此血書と以て推量るべし。仲丸殿ふ面會
て渡しまだ。さゝを悦びる事限なし。斯て我も遠く彼土へ渡ふ命滅をまぬれふ
あらじ。仲丸殿ハ御身のごとく至孝の子息あれども。ヨハいまだ一子無れば方
一異域の土とあらそ。無縁の幽鬼と成ぬべし。されど再會預ぢめ期しがた
それぐも。運ふ叶ひて仲丸殿も亨ゆ。萬なく帰朝せば。其時芽出度又まの
對面させ申べし。心長閑ふ待れよと。懇ふ教訓し。其夜より満月丸ど旬
の舘ふ寄宿させられけり。

吉備大臣入唐

斯て吉備公万事すゝふ准備繕ひる。糸内有て其旨奏聞せられぬ。

仲丸唖鬼千吉備公絶旧怨條

即ち帝より。舎人親王を以て唐帝ふ贈書と帯る。の勅書并ふ聘物ふと授け
のハ又金銀絹帛を吉備公へ下され加へおくるに天盃とさく賜り。太上皇よりも
種ゝの賜と給りけり。吉備公厚く天恩と謝まり御暇をかふ。て退出あり
遂ふ天平五年癸酉八月三旨都と發足し肥前唐津へ下着。九月中旬ふ出帆し
て大洋ふ舩を走らせるふ日ゝふ追風吹て舩の行吏矢の飛ごとく。海上ふ少
の障もなく。四年霜月十日明州の港ふぞ着岸しける。夫より吉備大臣ハ舩を
下従者ふ前後を警護させ。其ふ乗て長安の都へ到られれば。唐朝乃接
伴使駕我迎ひ鴻臚舘へ結ばる。吉備公旅舘ふて一両日舩路乃疲
我休め。偖接伴使の引路ふ従ひ行装美くく聘物花麗を飾ゝ唐帝
の宮室へ参内ありける。是玄宗皇帝開元二十年癸酉十月廿五日なり。玄宗
帝吉備公を華清宮へ結ぶ。左右ふ文武の大臣を列て對面のありければ。吉備公

唐帝ヲ拜礼シ聘物ヲ捧ゲテ帝ノ安躰ヲ賀シヤラルル事ヲ玄宗帝
譯官ヲ以テ問ヒタマフ。古ヨリ倭國ノ使者ハ正使副使判官録事等數人アル
ヲ正シ。今般臣吉備日本天子ノ動靜ヲ奉ル。遠ク貴國ヘ參ルハ別ノ義ヲイハズ我
今般只一人ヲ差越スハ不審ナリ。抑何ノ事ノ使者ヲヤト有ラレダ。吉備公答ヲ
日本皇帝堯舜ノ仁徳アルヲ以テ萬民ヲ撫恤シ妻母ノ赤子ヲ慈シムガ如ク。徳
澤八洲ノ外ニ及ヒ到ラヌ所ナシ。並ビニ倭國ハ曆法アリ。民ノ耕シ耘ル時ヲ過
ツル事ナシト。帝是ヲ感嘆シタマヒ日本ノ風土ニ適スル曆書ヲ製シタシト答ヘラル
ルニ。其儘トシテ貴國ノ金烏玉兎集トイフ書有テ
日月辰宿ノ度數及ビ天文曆法載ヲトリ用ヒラルル事ナシ。依テ其玉兎集ヲ須臾
借サレンヤト。臣ヲ入唐サセラレ
耕作ノ便ヲ得ダ。是貴國ノ仁徳遠ク日本マデ及ノ理アレバ。仰ゲ願ハ其

王兎集ヲ恩借ナシ男婁ヲ廢セラルル則吾日本皇帝ノ勅書是ヲイトテ恭ク
ク宣命ヲ取出シ唐帝ヲ捧ゲラレタリ。玄宗帝把上テ一覧アリ。偖宣ハク
日本王黎民ノ爲ニ曆法ヲ與ヘラルル
トノミ。彼書ハ大宗皇帝ヨリ代々珍藏シテ大臣ラトモ左右ニ見スル事ヲ免
ザル秘書ナレバ即答モナシガタシ。群臣ト商議ニ。其後有無ノ返答ヲ及ビ
ラレ迫ル鴻臚館ニ滞留有ルニ仰ラルル。吉備公拜謝シ。強ヒテ御拜
辭ノ間鴻臚館ニテ御答ヲ待ツヨリ外ナシトテ。其日宮中ヲ退出シ旅館ヘゾ
帰ラレケル。偖唐帝ヨリ接伴使ヲ以テ吉備公ヲ饗應シタマヒ山海ノ珍味
ヲ盡シテ酒宴ヲ催サレ更闌テ盃盤ヲ收メ接伴使ハ退去ル。吉備公ハ稍
酒氣ヲ帶ビ枕ニ着クト帳内ニ入褥ノ上ニ身ヲ横ラレケルニ五夜十夜ヲ過ヲ
ヘドモ程ニモ旅宿ヲ懐ヒ出ルニ況ヤ數千里ノ波涛ヲ隔テ唐

山の地ゑれど睡んとすれども魂眼を閉ぢ見る物皆珍しく異國にも曾て聞ぬ物ハ鐘の音乃至耳に響て愈目も合ざれば褥の上に起居り過来し方此思續け或ハ仲丸が生死の程心もとなく彼を想ひ是を念ひ打ふめり折しも何所よりとも知ず吹来る風に灯消んとして再明ゐなり其さへなく凄まじき心地せられ首を回して四辺を見るに灯ハ皆て半ばかりなる者あり其中に何者ぞや一人の女子ありて白衣拌ぎ衣を擔ぎ乱髪垂たる髻の上に冠を頂き顔色憔悴して渡細り眼ハ星の如く口ハ巨ふてさも恐ろしげに奇怪の者なり尋常の人あらず愴然として恐ま殘くぞ覚ゆる大勇の吉備公自若として些も驚ず。其変化の類にて我ゑ汝ハ何者ぞ。答よ変化の類にて我ゑ汝ハ何者ぞや一人の女子ありて白衣拌ぎ衣を擔ぎ乱髪垂たる髻の上に冠を頂き顔色憔悴して渡細り眼ハ星の如く口ハ巨ふてさも恐ろしげに奇怪の者なり尋常の人あらず愴然として恐ま殘くぞ覚ゆる大勇の吉備公自若として些も驚ず。其変化の類にて我ゑ汝ハ何者ぞ。答よ変化の類にて我ゑ汝ハ何者ぞや一人の女子ありて白衣拌ぎ衣を擔ぎ乱髪垂たる髻の上に冠を頂き顔色憔悴して渡細り眼ハ星の如く口

臣安祿山と云ふ者兼て唐の天下を簒奪せんと隱謀を企つれども我が唐帝の左右に在て只己が邪謀の妨げとある我なれば。我を欺き凌雲臺と号する高樓へ賺し登せ酒宴樂舞の氣を弱まさせ。我油斷と勘ぐて衆人悉く樓を下る所の梯子を引き外し。我獨り樓の上に殘りて下らんと行てども下られむ方なく。我命運の尽ぬる悲しさや我數ならぬ身なれども時後れて梯を下らんと行てども下られむ方なく。早梯を尽く引き取るも更なくて八下る吏能なども。數日水穀を得ざれば已に餓死に臨む。遂に舌噛切て死ぬるとも一念の靈ハ怨思となり再び倭國より暦書を請めんとて入唐をする人あるぞ。影身に添て力を助け玉兎集を得させんと其人を待つるぞ貴卿渡唐の後我存念を達をざき期素ぬると偖ぞ斯淺ましき姿と相見ぶ又ぴなりと涙と倶に袖を絞る。吉備公大ぶに殘れ偖ハ貴所ぶハさる大難ぶて早く幽冥の客となりのひるるや。御物語の如く小てをさ〳〵もの千苦萬労水上の泡と消侘者の為ぶ瞞られて自殺あるる悼ハさよ。倭國ぶハさる吏もせを

も貴君の死生定ぬるぞれだ。太上天皇臣と召ぶ入唐して金烏玉兎集と借帝め旦仲九ぶ生死と聞ん〳〵。存命をるあるぞ日船ぶて帰朝せよと勅給ぶ多き其のをぶず出京の御貴君の賢息満月九殿御身ぶ寄逢んめ入唐の義を頼をるれども随従の人數を撰政家言上せ〳〵後ぶ九ぶ力なく入唐の望をを止めよが舘ぶ寄宿させ置リ。彼満月九殿と八貴所の入唐有〳〵後ぶて出生あるぶ公の内君ハ故有て自害〳〵とぞ其を如此くの次第なると好根ぶ不義を言ひかけふよう君帥ハ刃ぶ仗満月九ハ汗手稲子ぶ抱れて。笠置郷ぶて成長。遂ぶ母の仇ぶ復〳〵入唐の望み叶ハざれぞ。無書を父ぶ渡〳〵れをと頼〳〵追一五十を給リ手文庫ぶ彼血書を取出て亡霊の前ぶさ〳〵置且やまれる八我疾ぶも貴所の行方を尋ひ其書を渡〳〵進せんと八思ひ〳〵ども。先勅書と唐帝ぶ皇〳〵暦書と借得て後貴所の所在を尋んと思惟せ〳〵ぶ思ひきや斯夢ぶの面會せんとハとぞ。衣袖を涙ぶ沾されぶハ亡霊

も愁並て。血書と手ふとりそへて涙を流し。我死て怨魂幽鬼となれど。却通力ふて
吉卿の妻の横死。兄好根が非義江寺稲すが忠貞。満月丸が孝心まで。悉く知いぞ
や。我もまさ児への紀念ふと。此國ふて詠ぜし蜂腰と。寛期ふ臨こ衣の袖ふ血書し
いけ。帰朝なりおいが児ふ渡し給れと。紬の中より衣とり出し吉備公の前
へさし出れば。吉備公手ふとり上てみるふ。天の原の歌と血汐ふて書くる。依く
再三唫じ返し心中ふ熟と歌の意を考て感慨あり。天晴秀詠ろう。是八唐土の
月を見て古郷三笠山ふ出し月を思ふれなるべとやされるふ。仲丸默首某帰朝
せんと。清川ふと明州の港へ到りふ此國の学友送り来り。餞別の酒宴を催し。待と
作合おどせし折中秋の月さし出ると朗らなりしも。故郷ふても此月と妻子のみるらんと
思ひやりてはらはら愚泳ふても児が文も血と以て書し。我歌も又血汐ふて書り。今宵の
血脈今夜四り逢しぞ不測なれと言て。又両くと落涙しふ。吉備公も其心を察し

実ふ其妻ふ我が出京の砌り。賢息が其文と持参有しも。子母銭乃古妻と
思ひ出し。即子息ふもやらず。妻の不測さよふあれど貴卿の死亡ふ八思ざりふ。帰朝して此紀念を御子
息へ傳おどせと悲るも怡びも未の字ふもあらで。又落涙をぞ催されける。亡霊
涙を掻ちらひ幻を改めし曰。児が義八るふ不足る私妻なり。只緊要の一大妻
ろ。今日宮中ふ貴卿退出あと後ふて。玄宗帝群臣と。彼玉兎集と倭國
の使者ふ借給ふや否やと拝綬あと。倭臣緑山が謂るやう。日本ハ土肥黎庶
豊なる妻万國ふ勝れると承る。然るふ秘書と借て彼土ふ響道聞けんや信
豊饒の上國とあり。我唐土の後乃患と成ん歟し。起とも日本王書信と越聘物
を厚くして頼まれるふ王兎集と惜む貨むなんど。武勇尖た倭人怒を發し
此土ふ寇せん妻も量れど。臣が愚按ふよふぞ。倭國おいまだ渡ぐる甚と。彼


吉備公入唐ノ時阿部仲丸ノ霊ニ逢フ
仲丸ノ霊ニ逢フ


吉備大臣

使者ヲ囲セ。碁ヲ勝テ父ヲ得ヨ。若勝ツ事能ハズンバ玉兎集ヲ貸ヘ。若勝ツ事能ハズンバ玉兎集ヲ貸マジ
ト約ジ。イヨ〳〵囲碁ヲ知ラザル倭人身ヲ賭テ其勝得ラレヲ知逃帰リンヿヲ
言ヘリ。唐帝ヲヂめ群臣実モヲテ基ノ勝負ヲ一決シ。対手ハ四百余州ノ碁
ノ名人ト呼ブル雁州ノ玄東トヘル者ヲ定メラル。彼ガ身ハ此土ヲ隻ヲノ碁
ノ上手ナル上。其妻ハ右将軍隆梨トヘル者ノ女ニテ緒技ヲ通ジ就中碁ヲ能
囲ム夫玄東ヲ擒勝ルヿヲノ名人ナリ。彼女夫玄東ヲ付従ヘテ。貴卿ト玄東
トノ碁ヲ見物シ。若玄東危キ隻アラバ助言シテ勝ヲトラセ貴卿ヲ恥辱
ヲ与ヘンヿヲ巧ムヿヲ。ハヤ〳〵ト約ジ。ヨイ〳〵ト約ジ。
ヲヘ。倭國ヲ傳ヘラルル囲碁ヲ我等ノ知ヲ乞ヒ碁ヲ開ヿヘヘバ玉兎集ヲ貸ト
ト拒ムヿヲ。囲ヲ負ケ必ヤ我身ノ進退窮リヲ彼秘書ヲ求ヘ
得ヘンヿヲ屍ヲ異國ノ土ヲ埋ンヿヲ覚期シ給ヘ。今更驚ク事ニ非ズトモ

我ヲ死セヘ太上皇ノ御望ヲ叶ヘ。且日本ノ恥辱ヲ残シ唐朝ノ者ドモヲ嗤笑
セシメン事ヲ抔惜ミ給ヘ。無念ノ涙ヲ流シ給ヘバ。仲尼ノ霊宝ヲ曰ク。悔ユル
ヘ我存生ノ時囲碁ヲ事ヲ覚ヘ。祖其定石ヲ知ヲ且劫遍方ヲ以テ貴卿ヲ助
ルノミヲ。玄東夫婦妙手ヲ尽ヘヲモ恐ル〳〵ヲ不足。唐ノ宮中ヲテ碁ヲ打
ヨト望マヘ畏ル〳〵事ヲ。玄東ト碁ヲ囲ミノ〳〵我公ノ法身ヲ付添碁ノ歩
法ヲ指揮シ必ヲ勝セヤバ夫囲碁ノ起源ハ古舜帝太子商均ノ智ヲ
生ゼシメン為ヲ初テ其碁ヲ造テ教ヘトヤ。黒白ノ石ハ日月ヲ象リ陽乃氣
ヲ表ヘヲ。石ヲ圓ク造ルハ天ノ象ヲテ盤ノ方ナルハ地ノ象ナリ。縦横ヲ十九ノ條ヲ
引テ日ノ数三百六十目ヲ表ヘ一年ノ日数ヲ表セリ。其間ヲ九ツノ黒点ヲ盛ヲ
星日トモ又ヲ勢日トモ号ク。星日トヘルハ九曜星ヲ准ヘル号ナリ。九ハ陽数
ノ極リヲテ勢ヒ強ヲ以テ。勢数トヘルヲ故ヲ勢日ト号ヘヲモ綴リ。碁盤ノ又

一尺二寸ある八十二枚を表一石の數三百六十一枚是半年の日數に准へ白石を陽にて晝を象り黒石を陰にて夜に象る。故に黒石を持者先をお是日を夜の九ツ子の時より始る我攻てなり。偖黒白の石を以て相向ふを陰陽應對の義にて陰陽の應對に他の物と交る事なし。故に側より助言もする事を堅く禁むるなり。黒白の石各地を取合ふ中に両目有を生と云片目及び目無を死とす。是世界天地萬物生死を以て大事とする義とぞ。其地を取爭を戰場の戰ひに象り一目にても地の妥き方を贏とを其手の名に斷。敵行盤抑緯関劫征などは皆戰場の約を用ひる。織に囲碁は活物にて其變化極りなし。其機に臨て要に應ずるの手段千變万化なり。我指揮のごとく手もなく。唐土無二の名人と呼ばれし玄東なりとも何ぞ畏るに足んや。心強く思ひ更へと絡るうち早曉の鐘更くと告らん。鷄鳴東天紅を報ずれば亡霊

も手を驚し風情にて。今は辞別やなりと云間もなく忽ち姿は烟の如く消失る

唐帝與群臣評議　玄東妻諫良人條

程なく夜は未ふけと明ぬる。吉備大臣は不思議に仲丸の亡霊に逢。其噴死のごとし。碁の盤觴盤石の名同宮中の評議の始末ふくる迫數細に委とりかたる。夢とも現とも弁へず覚束なく思はれるが。正く天の原の歌と血汐にて書し久の庁舘に坐辺に殘せる。満月丸の文を無ぞ忘れ。是亡霊我危難を助んとの訓疑ひあらじと心中に頼母しくおもひて佛色を唱へ仲丸の跡をぞ吊ひける。却説是より前に華清宮にて。倭國の使者ども退出せ後にて評議となり。安禄山がやふ仕世基の勝負に決し。火急に雍州の玄東と召寄明後日倭國の使者と囲碁の勝負となをぞ。主命を傳るふぞ。玄東敬て領掌し心中に想道は碁にぞ倭國へ渡ると社中のつる小倭人と其碁を囲よとの勅命を不審あれ。是深き子

細ある事なるべし。其ハ左まれ右まれ。四角殺も知ざる倭人ゆ勝んと掌を反すより尚安しと心中ゆ独笑して宮中を退出し。候舘にて我家へ立帰りける。玄東が妻隆昌女朝廷より俄ゆ夫を召ると。何ぞ御用やと安き心もなく良人の帰る。残待るゆ。玄東喜悦の色を含で帰宅しるゆぞ。少し心を安んじ夫を迎へて奥の室ゆ入夫妻座定りて後隆昌女夫向ひ今日王宮より倉率ゆ召のしを。何なる御用ゆてぞやと問れば。玄東完示として曰。先你も悦びへ我も火急の御召何の御用やと心を痛やしゝ案の外なる勅詔ゆて。今般日本より使者ゆ来り。吉備との者と囲碁とうち勝て恥辱をとらすべしとの義ぞうゆ抑碁ハいまだ倭國へ傳ハらざる時。倭人と碁を囲そゆ勝んと。更ゆ赤子の腕を捻るより尚安かるべし。我他の技や踈しとゐども。碁ハ幼少の時より好て。今ハ頗る妙所を自得きれば。吾國四百余州の中ゆても碁や碁を知る倭人ゆ於ゆハ勝得ず。況ゆ我ゆハ勝者恐らく有べからず。彼雖山の碁仙ゆても我ゆハ勝得ず。況ゆ名誉よハや。盤ゆ向ひ二十手おざる内ゆ勝君の御感ゆ預り。御賞物を頂戴せんと掌を指ゆ如くと。隆昌女実て少時沈吟し。偖夫ゆ向ひ吾夫囲碁ゆ達し。今般の役を奉りの事。家乃名誉と八申ながら。倭人と碁の高輸を競ゐ人御身の一大事なり。兵書ゆも小敵と雖も侮るべからずと。況や日本ハ小國なりとも古より人傑多く。況ゆ智勇の人傑多く。然も神国ゆて神の憑護ある倭人ゆをや。彼國へいまだ囲碁の法傳らざるとも。神変不測の妙術有て。碁盤ゆ臨み自然其手段と知まじきゆハあらず。其中の人の中より撰ミ出されて渡唐する八尋常の人ゆてハいまだ決て慢り油んじ給ふべからず。先年入唐せし仲丸と申人。其戈方人ゆもこゑれし帝深く重んじ給ふ臣下なりて高官を授けの人にて今度乃倭

使も其支機衆小勝を一人あるべ。万一御身一石ても劣員のすのあらば其身乃恥辱のこるべ。ず四百余州の恥なり。悔らく周く辞退しむかる妻よと言ふれば玄東朝臣の女心ふかく左程までふ倭人を恐るべくもあらず。我ハ敢て是を恐れずも文学武藝を競よとの勅命あるに時宜ふよりて辞退せを負るれば。基を知ざる倭人と基を囲ふよりも何と辞退さべき況や我囲基ふ妙を極めし妻と知召ての勅紹あれば争う辞退ふ及ぶんや。你ヲ〳〵心労もる吏勿れ。女あるに係も基ふ於てハ普通の者ふ勝まろ。試ふ一石あそ見んと。基盤基笥と取出し夫婦盤ふまり向ひ隆昌女ハ黒石を取て先をうち一石二石と互ふ石を下しるふ如何〳〵隆昌女が打下を三石めの黒石忽ち三ツ小割もろ。見ふ依て再黒石を把えてあふ是も同じく割るふ。隆昌女眉を顰め怪しふ一石あるに二石もそ黒石の割ハ甚ざ凶兆なりと言て手を止め深く怪しるて玄東ふ云て打笑ひ石の割る妻今ふ限りを何ぞ怪むふ足んや。取換てあそやと言られる妻ハ頭を振否左ふハあらじ。凡碁ハ天地陰陽の理をこめ黒白の石を交〳〵打ハ陰陽互ふ萌し一陰一陽巡つて一年四季を成ふ象ありて。されぞ石ふ陰陽あり黒白是なり。又數ふ陰陽あり。一ハ大極ふ象りて小今ふ第三石目の二四六八を陽ふて陰なり。三五七九ハ奇ふて陽ふ象る陰陽いわゆる分れざるなり。偖二石ふ陰体の黒石の割ハ陽より陰を破る乃理也つゝしんで慮るふ。日本小國と雖も此中華より東ふあるて陽國なり。吾此國を大國あれども。倭國より西ふ當て日本ふ對してハ陰國なり。陽の數ある第三ふ陰の黒石の割ふ残して考まるべ。今度倭人と碁の勝負を競るの心ハ恐るべくハ五矣員あり。前表なるべとて愁の色と面ふ見〳〵れぞ。玄東大ふ気色を損じ是を思ハれや係ふ心狭き女の量見より我曠勝員の先を折妻勿れ。夫物妻

我疑ひ遂に万吏皆疑ひ多き者なり。是を抵疑といひて識者ハ卑しめ笑へり。由て一言して我心の勇気を攬しらんと甚だ不興にて其名をお止て酒を喫し。稍酒氣を帯て玄東ハ卧房ニ入られども妻の隆昌女ハ黒石の二石を割しニ心頭を煩らハし。枕も着ず百般ニ工夫をこ凹らしもすがら其夜も早く明くれば玄東起出て何是と参内の准備をもしくるニ。唐帝より勅使弥明日宮中ニ於て倭國の使者と囲碁の勝負と競べられだ。早天より参内せよと中渡しくるゆゑ玄東謹んで領掌し。勅使を見送り沐浴して待程ニ其日ハ暮て當日ハなりぬれば未明より朝服を着し。冠帯を着て綺羅を飾り。馬ニ跨り手綱捌縁王宮をさしてぞ急ぎける。隆昌女ハ良人が従者を将て。意氣揚々と手綱捌縁王宮をさしてぞ急ぎける。隆昌女ハ良人が今日の碁の勝負を心ニ危く。其身も潜で宮中へ参りの所縁ある宮女を頼み。碁の席の給仕の女官ニ雑りぬ。玄東危くて是を助ん者と心中ニ思ひ殺け碁の

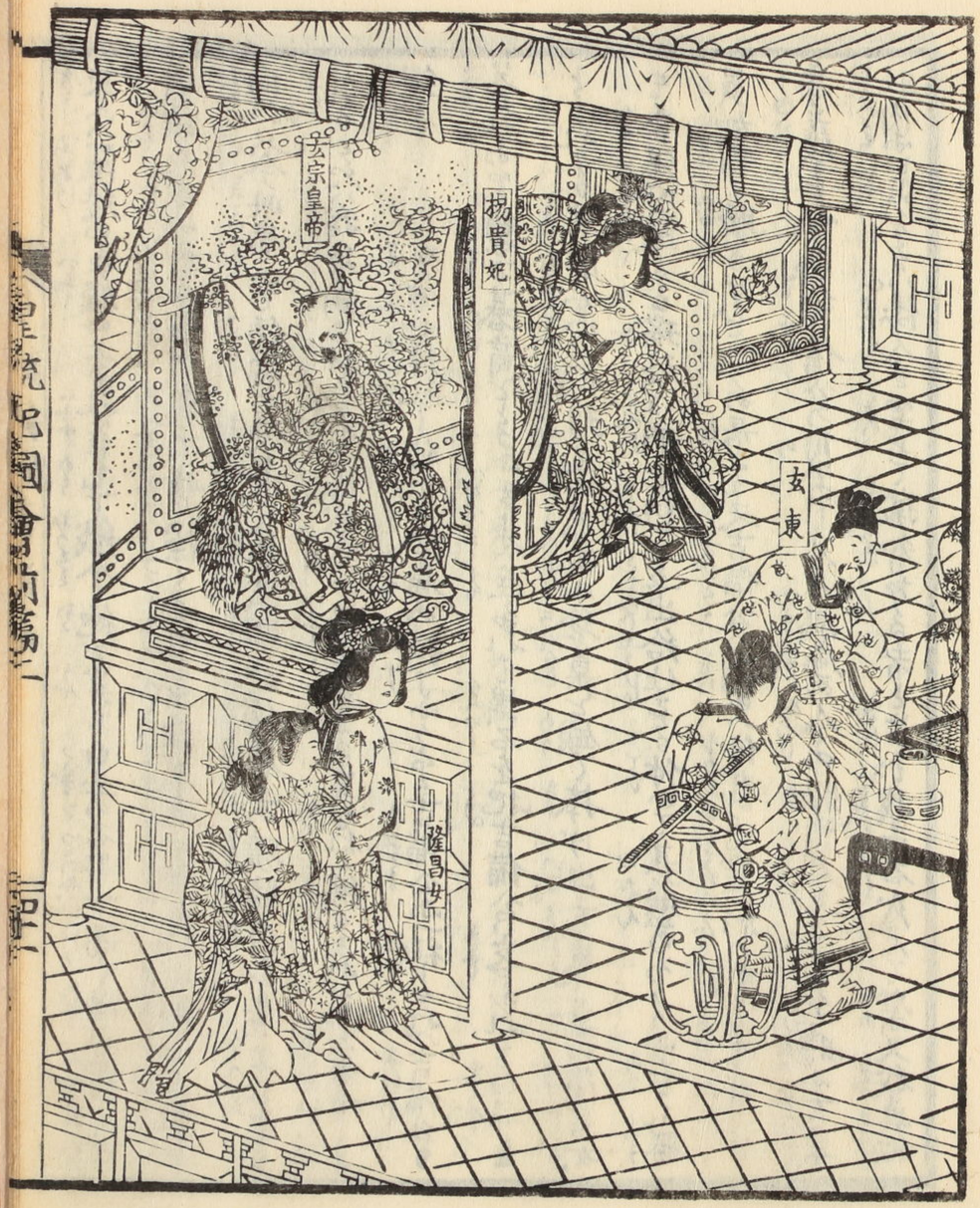
始る。我相侍ると。節婦の志どを感ずるよ

吉備大臣与玄東「圍」碁　隆昌女隠黒石吉備公ニ指更

時ハ唐朝の開元二十年十二月十五日華清宮の内なる長元閣の中央ニ碁の席を設正面の錦帳の内ニ玄宗皇帝金銀珠玉を鏤めたる椅子ニ悠然として碁の勝負を見物ある。帝の左右ニ玄宗皇后楊貴妃と始て。宮妃女官綾羅錦繍の袂を連紅顔翠黛花の如く粧ひて並び帳外ニハ安禄山楊國忠嘉訥観張九齢崔國輔以下の大臣堂々と列座し。惰中央ニハ鐵刀木の碁盤ニ金粉を以て目を盛るニ。推朱の碁笥ニ白石百八十と盛て基盤の上ニ飾り。白石を白渕濆と云る海岸ニ産る白石を磨れば銀泥を以て塗黒石ハ昆侖山ニ産る昌命石を磨紀盡く金泥を以て花鳥と蒔繪したるがごとし。二石を一環の玉も比をべき珍石なり。斯て帝宮人ニ命じて倭使吉備大臣を請せしめらるゝニ程なく吉備公宮

人を誘引せられて入まゐる。其衣冠ハ黒漆の冠巍威高く頂紫の纓を長く結
下深紅の小袖の上ハ浅紫の衣と襲顕紋金紗の狩衣ハ碧玉の石帯を締金造
の太刀佩又一徐くと歩て殺けの椅子ハ玄宗帝ハ礼然なり。列座の諸大臣も
礼を絶されるハ。安禄山進ぜ出。日本王金烏玉兎集を借需んハ足下ハ頼乃
書を持せて此唐土へ差越まされども。彼書ハ我君家代く深秘の珍書あれバ
容易ハ他國へ借ゞ。ハ。早日本王の需もハ默止ざる。我國ハ囲碁と号一
藝あると天文地理ハ基づて作殺る戯技なり。足下ハ我國の者と右の
碁を囲て能勝得られバ。其功ハ免で王兎集を貸与べし。勝事能ハ
人ぞ貸与じ。如何碁を囲ろくやと云ハ。安禄山心中ハ果して亡霊乃
告ハ違ざと思ひ。ハゞ。さあらバ是ハ思もよらぬ難題なり
碁とハ藝いまゞ日本へ傳らざと。不知技を為人ハ。さもあれ戯技とあなぞ

席上の遊藝ハて先生ハ拘る技ハ非る。ハ。先碁と中人を試ハおて我ハ
ハ一見して其法ハ倣ひ碁を打ハ。ハ。安禄山心可笑一度二度ハ
とも争ふ碁を囲む法を覚ず。ハ。ハ。
呼出し。你ハ此席ハて碁を囲ま倭人ハ見せよと指揮を内官領掌して両人盤面
ハ相對し。黒白の石を把てゞ碁を打ハる。張九齢吉備公ハ教て曰。凡盤面ハ世界ハ
象り。戦國ハ州郡を取争ハ如く。地の多れを勝と少れを負とす。彼と斬と云是
我除とハ。彼を却とハ是と関と内官ハ手ハ従ひて頻ハめ視ハを内碁ハ黒
て地を造ハ白石の方七石の勝と咸ハ吉備公熟と見終りて安禄山ハ向ひ碁ハ
手法會得ハせり。雖人ハてもあれ對手と出ハ見と望まれるハぞ。安禄山心中ハ嘲
ハ〳〵と絶ハ一盤の碁を見て。早呑込顔ハて可笑ハれと独笑ハ。茲ハ對手を出を
呼出させられバ。声ハ応ハて立出る。玄東ハ其旨の装


玄宗皇帝
楊貴妃
玄東
隆昌女


玄宗の前に吉備公唐土の妙手玄東と碁を闘む
仲ノ呂
楊国忠
安祿山
吉備大臣

東ハ羅綾の衣服の上ホ孔雀毛を織入れ袍を穿ち白玉の石帯を高く結び倫巾の冠
の頂ヘ手ホ象牙骨の扇子を携へ徐くと歩を出遥ホ席ホ着クレバ安禄山ヒ玄東ホ
向ハ只今此席ホて倭國の使者と基ホ打ンヘ倭唐土の曠勝負ホ至ホても
負るとヘハ我唐朝の恥辱なり心発憤て基席の椅子ホ寄ると吉備公ホ一礼ヲレバ吉備公も
領掌ー玄宗帝ホ拝ルー頓て基盤のホとりホ出給仕をる体ホて基盤のホとりホ在ル勝
答礼ホ至ホ雙方基笥とるホ玄東ハ主ホて黒石を把吉備公ハ客ホ列ル白石を
負ル。其時女官ハ珠玉の器物ホ珍菓を盛て捧げ出玄東ハ妻の隆昌女
も香湯ヲ湛ル瑠璃の瓶を執て立出給仕をる体ホて基盤のホとりホ在ル勝
負如何と瞬もせず打ンめ居ル又吉備公の側ホハ仲丸の亡霊影の如ク姿ヲ現シて
守護ヲレども只吉備公の目ホのミ見エ満座の人々の眼ホハ見エざるヲ以時ホ玄東
肚内ホ思ひくるハ倭人ヲ宅ホて猿智なる者と宅ホ我ホ名ヲ負ンて業又我真似

ヲ仕ヨ〻ホ小歩ホ移ホ在ホ。依て真似の出来ざる妙手と手ヲ〻と心巧ヲシて
黒石を把基盤の中央なる星の上ホ下ヒ打ル。玄東ガ手ヲる黒石の上へ重ねて下ヒ打ル。
是を見て思ハヒ吹出ー噇とヲひる。中ホも安禄山ヒ出石ハ手ホ小重ねてヲる
物ホあらヒ其ヲ小児の戯ヒヲせるやと嘲弄ヲ。吉備公色と正ー。我ホ重てヲる
物ホあらヒハ知ヒ。先ホ盤ハ世界ヒ象ヒ碁盤ハ世界ヒ象ヒ打ル基ホ小
して唐土ヒヲれヒ盤面四百余州なり。又日本ヒヲる時ハ盤面六十余州なり。
今ヒ対手ホ盤面を唐土ヒ。我ハ又日本ヒ手。並ホ小対手盤の中央ホ玄宗皇帝ノ御
位の石を打ヲれヒ。我日本の聖武天皇の御位の石を打ヲ地なり。故ホ唐土帝王の
位の上ホ日本天子の位の石を置ハなりと些ヒも恐ヲ色なくやさしヲるホ。安禄山
ヒ吉備公の大勝不敵の一言ホ拉ヒれ一言ヲ発

もる者もなく。宮中閑寂として昏く鳴を鎮やる。玄宗帝甚だ感じ給ひ。倭使の一言理の至極なり。四方小使して君命を辱めざるは。是亦の人を得たり。國家の臣と為て君小事る者小ならざるべし。斯くを有るべきと歎き。由あり名を択て吾國の恥辱をそゝぐべしと引出せり。早く名を引て正しく打よと喝令有るを小ぞ玄東大いに恐生赤面して黒石を揚られた。吉備公も白石を引き。玄東改めて先ず盤の庁隅小初石を打れむ。吉備公も手前の隅へ初石を下より互小思慮を凝して一石二石と手程小石の勢ひ巍々連綿として星の列るが如し。是仲丸の亡霊吉備公助言をる故なりされども其声其姿八一座の人々の耳小せえず眼ろそゞれむ。倭人を其色と知ると思ひきや。玄宗帝と着と見物さる輩。吉備公の石立を見て驚嘆せざるの者小増て況や慢り切一玄東八案小相違して對人ほのく先を打き心中大いに怒り額小汗の玉をなす。断んとおだ切まゝと腹だ刻まで推除を

打。初遍自在の亡霊の指揮あれば一目半石乃あざ手なく。互小五六石の端石を取く其八已小来一段と成小ける。隆昌女八始より給仕小妻よせ。双方乃石立小目を賦して見る居りけるが。吉備公の石立悉く法小合ひ機変の妙手夫玄東も及ざる紆れむ大いに残れ。口の中小て同義をるべき。玄東八三石眞の体あれば是八打猶やと思いも助言をる事も能ざる。手小汗握つてうなる内小碁早終りて拍手戎嗣駄目を埋おどろ隆昌女堪ず。吉備公の取ざる一黒石の端間を一石盗く取紙小つゝんで暗小吞八入れ。余人を知されど仲丸の亡霊八其と知て吉備公小知せられる。如何思れけん尚不知負小て地を造られるべき。双方の地三十目づゝ有て對碁となり。互小勝負なきうち。実八白方一石の勝成るべき。隆昌女同義して早く夫の眞と知黒石一ツ残呑隠しける内小對碁八成りける。一座の君臣悶果。奇あるうち小妙なり哉いざ倭國へ傳うべき囲碁七只一度ん て其法を知。剰へ唐土迄一ツ名人と呼れる玄東と地碁をおく事。不測とらくも踈也

実も倭人を神の應護あるとくるも虚説ぞと或ハ感じ又恐を孝すも有るが斯く双方石を収め肉宮の吉凶を筭へ改むるが黒石一ツ不足るハ飛散しまとも其あるとを尋ね捜せども更かゝ。若袖中へ入しかと。吉備公玄東と共に。盤の辺ゟ見物して居るる人〳〵列座袖を探り懐中を捜せども曽て無りけるゆへ。肉宮ハ首を疾しめ。是を不測の変なる。始め筭一時ハ黒石百八十石有るが畢竟ハ一石不足有るゆへ。一石とらんも筭ハ常の石あるぞ。一石とらんも筭ハ同じ捨置ば。且又黒石今一石あるぞ。玄東ハ一目の負あり唐土の員と成ぬ。一石ゟ捨おいて筭盤せんと。倭國へ帰りて紗汰ある時ハ吾唐朝乃恥辱ぞれ。決して捨置ぞと言るゆへ玄宗帝聞食崔國輔が所理りなり。

此席ゟ列る者。玄東ゟ員を隠さんとあ。一石を懐中ゟ隠しをゟ捨おいて倭國の縑綉を受んもしらざ。然を迎衣服を脱せ。裡ゟ一石を捜し出さゞる器ぞあれ古乃扁鵲が傳し彼照病鏡を取出し。此席も在者ども乃懐中残ず一人ゝと勅紹あるゟ依。官人ども奉り急ゟ宝蔵ゟ件の名鏡を取出来り珊瑚の鏡臺ゟ居て宮中ゟ飾り玉ふる。抑此照病鏡と云る鏡ハ元天竺ゟ傳来せ宝鏡ゟて直一尺二寸裡ゟ九曜破軍二十八宿を鋳ゝ表ハ明月の如く光暉た鏡の面ゟ向ふ者ハ衣服将来我善悪ゟ五臓六腑まで透徹りて守り断も隠るゝ事あれ希代乃宝鏡ぞれ。扁鵲是を得て病ある者ゝ鏡面ゟ向ゟせ其病何ゟの臓腑ゟ有やと照し見て治療せんとやる。うる寿特の霊鏡ぞれバ代〳〵の帝王ゟ傳りゟ今唐帝の宝器となり。九重の宮ゟ収め深く宝蔵ゟ秘置のゝ至宝あれども。今其名石の紛失ゟ依て。其隠し主を穿鑿のゝゟ断取出さる所なり。是ゟ依て玄東を首ゝ。一座の輩尽く

く鏡に向ふ衣服懐中ハよく及ぶ。腹中の臓腑まで残る隈もなく見え徹りてるゐを向ふ程の者奇異の思ひをおさずとく者あり。碁ども碁石と覚えし物もうえをゝ。吉臣より内宮宮女ふいろまで一人く検者と受て立退今ハ隆昌女一人と成りてゐ。隆昌女ハ素り石を呑隠せしぞ。鏡に向ひ忽ち吏露顕し。我身ハいま更なり夫玄東まで連座の罪に陥り。夫婦とも市に刑られんと。思ひ気臆し身躰戦慄顔色如来十分恐怖の色をゞ表しくる。安禄山ハ隆昌女と玄東が妻なりとハ知ざれども彼ゞ猶豫もる気紛り。係も始より碁盤のおくに居られゞ疾く鏡に向へよとせりたる小吉備公を隆昌女ゞ石を隠せし吏を知ざれども深く子細あん吏と察し。其罪の露顕せんを恐る色を見て。心中に憐く安禄山我宿め。先刻より種く碁石の穿鑿あるゝ倭國人ゆゑ我慮りのみにて吏ゆゑ石のうえざる上ハ念無筆誤りあるべし。女人の碁石を隠さゞべきもあらず。女性ハ別に包まく思ふ吏

も有るのあれや鏡に向ふを厭ふるも無理あるゞ。今ハ宥し得させ吏と有れども安禄山承引せざゞ不已緒人皆鏡に向ひ此女のみ鏡に向ハざるハ疑ハし。向ひても怪しき義あらず吏滑稽し。疾く鏡面に向へよと言厲しく声を隆昌女が耳に百千の劒を串るが如く安禄閻大王の廳前にて浄破利の鏡に向ひ罪人の苦しむを我身に思ひ知るが如く眼前に衣隠しくる黒石を見顕さるゝとハ知ながら為方なく恐る〳〵鏡に立向ふに明月のでく衣服の裏迄透徹り五臓六腑までも隈なく写るが如く身のもも堅て恐〳〵支退んとすると安禄山襟掻摑んで動ざるゞ眼を睜て能くうれば隆昌女が胎中の上腕と中腕の間に絡ひ包如き黒く圓き物或ハ昇り或ハ降るゐを安禄山大声に呼て此女碁石を呑隠しくる胎中に怪しき物ありと呼るゐを隆昌女ハいふ及ばず。玄東も仰天し針の席に坐まる心地しくる吉備公鏡面を見て安禄山に向ひ足下の目鑑違ひたり此婦人の胎中に黒く圓き物昇降するハ形ち碁石に似られども左にあらず。是ハ平く懐妊

せりと覚ゆ。絹糸の白く如く見ゆるハ則ち胞衣なり。彼胎家未分劒ふ婦人懐胎の始を夫の精液母胎ふ入れ。其形ち圓圍として其色黒く。是を阿羅卵と号く。七日七夜ふして変じて残阿浮曇と号をと有今婦人の胎肉ふ見ゆる物ハ子腫ふ拘違有べし。ずふれば壮覚ある身も鏡ふ向ふ妻を厭ふハ懐妊せしを恥ての義あり。女の子腫と宿せるハ常の妻ふてまのく恥る妻ふハと微笑ひてやよれなれ。隆昌元吉備公の仁心骨身ふ徹りて忘ぢく喜涙ふ袖を沾しつゝ。其緑山懐胎の論を信ぜられども。玄ゞ石と呑隠せしふ一決する時ハ玄東が夏とある義ふ心付吉備公の議論ふ任せ。甚石ハ筆違ふかなて守歟の義を後日の沙汰ふをべしと妻落着しぬ。隆昌元八毒蛇の足と免まし心地ふ怡ぶ妻限ふ時ふ玄宗帝吉備公ふ向ひ給ひし。基の勝負互角なれど又得失なし。先今日ハ旅館へ帰られよ。暦書の義ハ紆綴のよふて妻と定む可しと宣ひしかば吉備公承伏ありて宮中と退出し鴻芦館へ帰られぬ。諸大臣玄東夫妻も皆御暇を給りて各王宮を下げる

名古屋
大曽根 矢野平兵衛藏版 畧書目

増註十八史略	刻近七冊	小學讀本	四冊	尾張明細圖	一冊
四書集註	十冊	同字引	一冊	改正増補 早引節用集	一冊
大學	一冊	農家小學	一冊	東春井郡地誌略	一冊
中庸	一冊	日本畧史	二冊	同地圖	一冊
論語	四冊	小學入門教授法	一冊	唐詩選	一冊
孟子	四冊	明治用文章	一冊	小倉百人一首	一冊
古文孝經	一冊	幼童必携	一冊	四書字引	一冊
人民必携 公用文例	一冊	日用塵功記	一冊	道二翁道話	近刻五冊
日用必携 證書文例	一冊	府縣郡名録	一冊	説教道話	近刻六冊